The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

近代日本仏教における異文化情報の受容と発信
——青木文教撮影チベット写真資料を中心に——

高　本　康　子

1．はじめに

青木文教（1886-1956）は，浄土真宗本願寺派第22代門主大谷光瑞（1876-1948）によるいわゆる「大谷探検隊」の一員であり，1912年から1916年まで，チベットの首都ラサに派遣された人物である．彼の『西蔵遊記』（内外出版，1920年）は，日本人のチベット旅行記として，河口慧海『西蔵旅行記』（博文館，1904年）に続くものであるが，河口旅行記の画像が挿絵であったのに対し，写真の挿入が多いのが一つの特徴である．日本人撮影のチベット写真としては，既に，1901年に入蔵した外務省派遣の成田安輝（1864-1915）による40枚があり，うち24枚が1904年の『地学雑誌』に発表された[1]．しかし成田はラサに入る直前にカメラを紛失しており，従ってラサの写真は持ち帰らなかった．インド国境のヒマラヤ地域の写真としては，画家石崎光瑤（1884-1947）の『印度窟院精華』（便利堂，1919年）があるが，私家版のためごく限られた人にしか知られていなかった．

これに対し，青木の写真は，ラサでのチベット人の生活を，日本人として初めてカメラに収めたものであり，新聞という，多数の人々が接触可能な情報媒体で公開され，更に，それを上回る点数が，単行本に収められて出版された．本論ではこの点に注目し，近代日本における，仏教者による異文化情報の受容と発信のありようを考える上での，ひとつの有用な資料として，青木文教の著作に掲載された画像資料について考察する．なお，写真を掲載した青木の著作としては他に，60枚が収められた『亜細亜大観』（亜細亜写真大観社，1927年）がある．しかし本論では，掲載点数と，写真の撮影者その他典拠に関する情報が多いことなどから，『西蔵遊記』を主な検討対象とした．

2．『西蔵遊記』所載写真資料概要

『西蔵遊記』所載写真151点中の126点に，「著者原画」，「著者所蔵」，「外著複

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

写」,「マクドナルド氏寄贈」,「光瑤画伯寄贈」,「ツァロン氏寄贈」,「ツェリン氏寄贈」といった付記がある.「著者原画」とされる写真は84点あり，青木撮影，もしくはネガを彼が所有していたと見られるものである.「著者所蔵」とされる写真は12点であり,青木の将来品が被写体となっているものである.「外著複写」とされる写真は15点である.『西蔵遊記』では,「外著」の典拠は明示されていないが，すべて，ダージリンでチベット研究を行った英国人ウォデル（Laurence Austine Waddell, 1854-1938）の *Lhasa and Its Mysteries*（London: Methuen, 1906）からの複写と思われる[2].

「マクドナルド氏寄贈」には7点ある．この「マクドナルド」は，1905-25年にチベット国境において通商事務官を務めたデヴィッド・マクドナルド（David Macdonald, 1870-1962）であると思われる.20世紀初頭に入蔵した日本人はいずれも，チベットと英領インドとの国境地帯を管掌とするこれらの英国人官吏たちと接触しており,青木も例外ではない.『西蔵遊記』や,帰国の際書かれた青木のメモ「出蔵記」[3]には，マクドナルドとの写真交換や，当時英国の対チベット外交の現地責任者であったチャールズ・ベル（Sir Charles Bell, 1870-1945）の招待等に触れる記述がみられる（『西蔵遊記』，394-397，454-455頁,「出蔵記」2月23日，26日，3月4日付部分）．更に,『西蔵遊記』その他において，ベルとの写真交換等に触れる記述はないが，英国ピット・リバー博物館所蔵のチャールズ・ベル・コレクション中に,「著者原画」中の一枚と同一と思われる写真がある（番号1998.285.282.1）[4]．これも，青木とベルとの交流を示すものの一つと推測される.

「光瑤画伯寄贈」には3点ある．この「光瑤画伯」は，前述の日本画家石崎光瑤であると思われる．彼は1917年のヒマラヤ旅行の際，出蔵直後でダージリンに滞在中の青木の助言を受け，青木宅に宿泊した（前掲『印度窟院精華』付記行，18，24頁）．前掲『印度窟院精華』以外の，石崎家所蔵未発表写真の中には，後に前掲青木『亜細亜大観』に発表されたものが1点含まれる[5]．このことも，石崎と青木の間の写真についてのつながりを示すものであると思われる.「ツァロン氏寄贈」には,3点がある．この「ツァロン」は,ダライラマ13世に抜擢され,軍司令長官，大臣を務めたツァロン・ダサン・ダドゥル（1885-1959）と思われる.彼の妻の一人リンチェン・ドルマ・タリンによれば，写真を趣味の一つとしており，自宅には暗室も設けられていたという（R・D・タリン『チベットの娘』三浦順子訳，中公文庫，1991年，158頁）.『西蔵遊記』,「出蔵記」にはツァロンとの応接に触れる記述があり（『西蔵遊記』126-128，377-378頁,「出蔵記」1月26日付部分),

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

青木との交流が推察される．「ツェリン氏寄贈」とされるものは1点である．現在のところ，『西蔵遊記』その他青木の記述に，この人物に関する情報は見えず，特定には至っていないが，あるいは「出蔵記」2月7日部分に言及される「旧友 Dorji Tsering」かとも推測される．

その他，説明文等は付されているが，出典に言及がないものが25点ある．この中には，「現在の達賴喇嘛法王」（『西蔵遊記』，362頁）のように，マクドナルドの著作と共通する写真も含まれる（*The Land of Lama*, London, 1929, 巻頭）．マクドナルドと交換あるいは彼に貸与した写真の一例かとも考えられる．

3．『西蔵遊記』の写真の特徴

『西蔵遊記』をはじめとする青木の著作所載の写真には，現地の人々の生活を被写体としたものが多く見られる．例えば，大谷探検隊の包括的な記録としては唯一のものである『新西域記』（有光社，1939年）収録の各報告中，この種の写真の割合は青木が最も大きい[6]．同書が大谷探検隊の総括的な報告書として，各隊員の調査内容を端的に示すものであるとするなら，ここには青木がラサで行った活動の特徴の一つが現れていると思われる．

この背景には，彼を派遣した大谷光瑞の意向があると思われる．大谷探検隊の調査の手引書とも言うべきものとして，探検や旅行の注意点を306項目詳述した，大谷光瑞口述「旅行教範」がある（『大谷探検隊資料』中田篤郎移録，解説，龍谷大学仏教文化研究所西域研究会，1995年）．この他にも大谷光瑞が隊員にきめ細かく指示を出していたことは，例えば，山田信夫が既に指摘している通りであり（「解題」『新西域記』別冊，井草出版，1984年，24頁），また隊員もそれに非常に忠実であったことは，橘瑞超の記述等からも明らかである（「新彊探検記」『新西域記』下巻，有光社，1939年，803頁）．青木に対する光瑞の指示を直接示す資料は，『西蔵遊記』に「大乗無量寿荘厳経」の翻訳についてある（367頁）以外，現在のところ見あたらない．しかし，青木がラサ滞在中に1日2回気象観測を実施，記録している[7]ことは，前述の「旅行教範」の指示の一端をうかがわせるものであり，その指示の存在は充分推測できよう．大谷光瑞は青木と多田等観の二人をチベットに派遣しているが，二人の活動内容は対照的で，多田はラサ郊外の名刹セラ寺院でチベット仏教の修行と研究を，青木はラサ市内の貴族の邸宅に寄寓し，チベット事情調査を行った．青木の写真の持つこの特徴は，このような寺院外での調査の結果生まれたものと言える．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

更に，青木の写真の最大の特徴はチベットの人々の肖像写真にあると思われる．青木の肖像写真は，被写体が衣紋やポーズを整えた形で撮影されている．『西蔵遊記』には，肖像写真として撮影されたと推測される写真が，例えば，室内装飾に触れる際に挿入された貴婦人の写真（『西蔵遊記』，335 頁）のように，チベット事情を紹介する記述の各所に見られる．また，子供を被写体とする 7 枚がある（『西蔵遊記』49，277，279，324，339，341，447 頁）．特にラサで撮影されたと思われるものは，服装から見て上流社会に属すると判断される子供の肖像写真である．これは，青木以前の海外の旅行記には見られない特徴であり，ベルやマクドナルドの旅行記にも掲載されていない．これらのことは，青木が撮影した肖像写真の点数の多さと，被写体となった人物，撮影場所のバラエティの幅広さを如実に示すものであると言えよう．

以上のような青木写真の特徴は，「無料撮影の写真師として忙殺された」（『西蔵遊記』，371 頁）という青木の記述や，多田の，「写真技師として上流社会で大歓迎を受けた」（「ラッサ時代の青木文教さん」『日本西蔵学会々報』第四号，1957 年，2 頁）という記述を裏付け，当時ラサの上流社会で，青木による肖像写真撮影が流行したことを示すひとつの証拠であると考えられる．

4．おわりに

『西蔵遊記』においては，豊富な写真によって，チベット情報がきめ細かく視覚化されることとなった．これらの写真の原版は戦災で失われたと推測され[8]，またネガ等も未発見であるため，現在，青木のチベット写真は著作以外では見ることができない．

チベットで撮影された写真に対する再評価は，その種の写真が最も多く残されていると考えられる英国においても，ピット・リバー博物館と大英博物館のプロジェクト（The Tibet Album: British Photography in Central Tibet 1920-1950）のように，開始されたばかりである．青木の写真は，当時のチベットを伝える資料として，1903-4 年のヤングハズバンド・ミッションの際撮影されたものと，1920 年代以降，ベルを初めとするチベット駐在官吏によって撮影されたものの間の時期を埋めるものであり得る．加えて，チベットに関する画像情報の，国内・海外における流通のありようを示す資料でもあると言える．

1）いずれも「成田安輝氏拉薩旅行写真集」と題し，短い説明文を付して掲載された（『地

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

学雑誌』183-186号，191，192号，いずれも1904年）．また，掲載初回『地学雑誌』第183号には，小川琢治による解説がある（小川琢治「成田安輝氏拉薩府旅行」，193-194頁）．

2）『西蔵遊記』の「外著複写」写真の出典について以下，同書所載頁を「～頁」，前掲 *Lhasa and Its Mysteries* 所載頁を「p.～」で示す．57頁：p.112, 83頁：p.234, 115頁：p.290, 171頁：p.152, 221頁：p.392, 285頁：p.176, 306頁：p.168, 381頁：p.308, 383頁：p.314, 386頁：p.306, 393頁：p.280, 413頁：p.122, 416頁：p.96, 417頁：p.92, 445頁：p.66.

3）「出蔵記」は国立民族学博物館青木文教師アーカイブ中の資料である（番号60，長野泰彦，高本康子編『青木文教師アーカイブ『チベット資料』目録』国立民族学博物館，2008年）．なおこの「出蔵記」は同館より2009年度中に出版される予定である．

4）英国のピット・リバー博物館，大英博物館所蔵のチベット関連写真は，1920-50年分がインターネット上で公開されている（The Tibet Album: British Photography in Central Tibet 1920-1950）．これによれば，当該写真の撮影者，撮影年月日は未確定である．

5）当該写真は，富山県［立山博物館］編『石崎光瑤幻灯用彩色硝子板作品（印度行記）』写真資料集①，富山県［立山博物館］，2000年，18頁，青木文教『亜細亜大観』第四輯第三回，「十，ダーヂリン（四）」にそれぞれ掲載のものである．

6）例えば『新西域記』中掲載写真数が最多の吉川小一郎「支那紀行」は8%，次に多い渡辺哲信「西域旅行日誌」は6%，一方青木文教「西蔵入国記」は18%である．

7）例えば，ラサの気象について，青木文教「西蔵調査報告」（『国立民族学博物館研究報告』30巻3号，長野泰彦・高本康子校訂，2006年，349-419頁）には1914年1-4月の，前述青木文教「入蔵記」には1913年2-3月の観測記録が含まれている．

8）国立民族学博物館青木文教師アーカイブには，戦災で欠失した写真資料のリストと思われる資料が2点含まれる（「写真内容」アーカイブ番号322，「戦災欠失分補欠写真目録」アーカイブ番号261）．

〈キーワード〉　青木文教，チベット，写真，日蔵交流

（群馬大学国際教育・研究センター「アジア人材資金構想」担当講師，博士（国際文化））

NII-Electronic Library Service